

正智深谷高等学校特別コラム

Mind Charging

Since 2020

第260回

ミゲル・デ・セルバンテス

の名言

発行：入試広報室

発行日：令和3年6月28日

編集委員：入試広報室 鈴木



今回の言葉

True valor lies between cowardice and rashness.

真の勇氣は臆病と無鉄砲の中間にある。

ミゲル・デ・セルバンテス・サアベドラは、近世スペインの作家。『ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャ』の著者として著名。

Column

臆病とは“気が弱く些細なことで怖がったり、怖じ気たりすること”とあります。そして、無鉄砲とは“是非や結果を考えずにむやみに行動すること”とあります。無鉄砲の意味を改めて調べた時に私も知った余談ですが、無鉄砲とは当て字であり、「むてんぼう（無点法）」、または「むてほう（無手法）」の音変化ということだそうです。

今回の言葉にある『臆病』と『無鉄砲』ですが、イメージとしては確かに両極に感じますが、対義語として調べてみると“勇敢”とありました。勇敢とは“勇氣があり積極的に行動すること”とあります。そして、もう一つ“豪胆（ごうたん）”という言葉も対義語として紹介されており、“度胸があり、何事にも動じないさまのこと”とありました。

無鉄砲という言葉の意味やイメージから今まではあまり良い印象を受けなかったのですが、今回の言葉について考えているうちに、これまでとは違うイメージになりました。かと言って『無鉄砲、大賛成！』とはなりません、時として必要な場合もあるのかなという気持ちになりました。その理由は、勇敢とは“勇氣（意識）”があることを前提としていますが、無鉄砲の意味にあった『考えずにむやみに行動』という部分に『無意識』を感じたからです。“勇氣を出せば積極的になれます！”という人と、“気づいたら積極的に動いていました！”という人では、どちらが『真の勇氣』がある人なのか。私には後者に感じました。その後感じたことは、無意識であっても勇氣が出ていることは間違いないということです。そして、奮い立たせた勇氣だから“作りモノ”ということではなく、むしろ『覚悟』を決めたという意味では非常に強い本物の勇氣だと捉えることもできます。その一方で自覚もなく自然と湧いた勇氣で立ち向かい、夢中で挑戦している途中で我に返り、そこで感じたプレッシャーにより勇氣が消える（弱まる・プれる）ということもあるのではないかと感じるようになりました。さらに、『挑戦しない』という決断をすることも、その時の状況によれば勇氣を必要とするのではないかと、『臆病だからこそその勇氣』もあるのではないかと私は考えます。

これからみなさんは様々な困難に立ち向かうことでしょう。その時に必ず勇氣が必要となります。判断と実行を間違えないという意味で、今回の言葉を胸に刻んでおきましょう！